

同窓生若手英語教員対象研修

——統合的な教師教育を目指して——

Training for Novice Alumni English Teachers: Aiming for an Integrated Teacher Training System

湯川 笑子・山岡 憲史

YUKAWA Emiko・YAMAOKA Kenji

I はじめに

本稿は、立命館大学での英語教員養成に約10年間携わってきた著者らが、自ら指導した同窓生英語教員に、さらにどう支援できるのかを模索し試行したパイロット実践の企画過程と実践結果をまとめたものである。昨今は、新卒の段階から高い実践力が求められ、世界のグローバル化に伴い、英語教員に期待される教科指導力も高い。

しかし、就職前のトレーニングと現実の間には大きなギャップが存在し、乗り越えられない場合も多い。(海外の第二言語としての英語を教える教員に関する研究で同様のことを指摘する文献に、Farrell (2012), Faez & Valeo (2012) がある。) 文部科学省の調査によれば、公立学校で専任として採用され、初年度を終えた段階で条件付採用制度から正式採用に移行できなかった教員が平成19年度で301人となり、平成15年度の111人から順次増加の一途をたどっている(文部科学省 n.d. a)。

全国の公立学校では、自治体ごとに初任者研修や10年経験者研修を初めとした研修制度が存在する(文部科学省 n.d. b) が、これらの研修は基本的に教師生活全般を扱うものである。したがって、大学時代の教科指導の土台を踏まえ、「授業」に特化し、大学の専門性を生かした研修は、別途大学独自に提供する意義があると思われる。

さらに、同窓生教員に限らず、立命館の5つの附属校に着任した教員をも対象とする研修、また、ベテランの附属校教員の力も借りて行うという研修、つまり、何層にも連携した立命館大学ならではの研修を組み立てることで、就職前の学生・院生も含め、若手、ベテランに至るまで統合的に学

び合う教師教育の在り方を追求したいと考えた。本稿で報告するパイロット研修実践とその省察は、こうした組織的な英語教員養成構築を目指して、その第一歩を踏み出そうとするものである。

II ニーズベースの研修企画の背景

立命館大学の英語科の指導法に関する科目は、5種類が用意されている。2010年度入学生以降に適応する現行のカリキュラムでは、「英語科教育概論」と「英語科授業研究」が中学・高等学校の表法に必要な必修科目となっている。さらに、「英語科教育研究」という講義科目が中学校免許取得のための必修科目となっており、それに加えて発展演習科目として、「英語科授業演習(中学)」「英語科授業演習(高校)」を選択科目として履修できるようになっている。それぞれの科目の開講クラス数、最近の担当者と受講者数の概要を下に示す。

- ・英語科教育概論 前期、後期各1クラス開講
合計およそ100名程度受講
(2005年-2009年は湯川担当、2010年より
湯川および非常勤講師で1クラスずつ担当)
- ・英語科授業研究 1クラス30名以下に限定、
5クラス開講 受講人数はクラスにより多様
湯川、山岡、および非常勤講師2名で担当
- ・英語科教育研究 前期、後期各1クラス開講
合計およそ100名程度受講
山岡および文学部所属英語教員が担当
- ・英語科授業演習(高校) 後期1クラス開講
10名程度受講 山岡担当
- ・英語科授業演習(中学) 後期1クラス開講
10名程度受講 非常勤講師担当

著者らのうち湯川は2005年度より、山岡は2006年度より立命館大学の英語教員養成を担当してきた。著者らが直接指導し、2007年4月以降、全国のあちこちで教壇に立っている同窓生英語教員は、連絡先が判明している人数だけで111名存在する。（以後これらの比較的経験の浅い英語教員を便宜的に「若手教員」と呼ぶ。）その中には、2003年に設立された言語教育情報研究科で英語教育を学んだ者も含まれている、この間、立命館附属校に勤務する英語教員は年々増加して、2013年度現在、専任、常勤講師、非常勤講師を務めている2007年度4月以降卒業の同窓生英語教員は合わせて17名に及んでいる。

そこで、著者らは、立命館大学教職教育センター長、および教職教育課とともに、2012年度に、初めて同窓生英語教員の追跡調査を行った。（結果は、湯川・神藤・山岡・太田（2013）として未公開報告書にまとめ、一部はYukawa（2013）として公開した。）追跡調査では次の4つの課題を明らかにしようと試みた。（1）若手教員は自分ほどの程度の教科指導力を持っていると考えているのか。（2）若手教員の現在の教科指導力は、大学での教職科目の基礎的な科目の成績とどのような関連を持っているのか。（3）若手教員は立命館大学での教職課程や大学院で、実践的な指導力をどの程度身につけることができたと感じているのか（4）若手教員は現在、どのような研修を大学に期待しているのか。

調査では、J-POSTL（Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages）（JACET教育問題研究会2011）の中から、英語教師として必要な能力の記述文16項目を選び5件法でそれらの能力をどの程度持ち合わせているのかの自己評価を求め、さらに、若手教員のプロフィールや勤務状況、授業の様子を聞いた。また、記述式で、大学の教師教育を振り返って感じることや、今後の研修についての要望も聞いた。111名に対し質問紙を送付し、33件の有効回答を得た。

この結果、若手教員は英語教員の教科指導力として挙げた16項目の指導ができるかどうかについて、（5段階評価の中で）真ん中の「どちらともいえない」からかろうじて「～できる」によ

た、3.0～3.5の自己評価をしており、特に、「評価（定期テスト作成など）の仕方」、「自律的学習の支援」をはじめとして、現在高校で強く求められている発信の指導や、基本的な技能である「基本的な発音指導」、「リーディング指導」、「リスニング指導」などについても一様に、力量不足であると自己評価をしていた。

自由記述部分では、大学での教科指導に関する指導から多くを学んだとしている半面（湯川・神藤・山岡・太田2013）、職場でもっとうまく教えることができなければいけないという認識のもと、忸怩たる思いを抱えながら毎日を送っている様子がうかがえた。

また、当然のことながら、多岐にわたる教科外の生徒の指導に戸惑っているらしい様子も伝わってきた。今後の教科指導に関する機会についての要望を聞いてみると、対面やオンライン両方で、母校が提供する研修を切望していることが分かった。

また、著者らは附属校（特にアクセスが容易な近畿の附属4校）との交流が深いことから、新しく附属校へ赴任した同窓生教員の様子を、毎年継続的に観察している。新規に着任したばかりの教員や経験の浅い同窓生教員の授業には、改善すべき点が多々見られ、授業後のフィードバック（および励まし）に例年時間を割くようになってきた。

以上、追跡調査と附属校教員の観察から、若手教員の教科指導研修のニーズが非常に高いことを知り、今年度、現職教員を対象とし、調査結果でニーズが高いと思われたことに焦点化した3回シリーズの研究を企画した。

Ⅲ パイロット研修内容

以下に、全3回の研修内容を示す。

表1 3回の研修内容

第1回	2013,6,22「英語指導の基礎がため」
	14:00-15:10
	1.1 英語習得に必要な5つの要素、4つの目的別活動（講義）
	1.2 中学生に実力をつけるための帯活動（workshop）
	湯川

15：30-17：00	1. 3 高校「英語表現 I」の教え方 (workshop)	山岡
17：20-19：20	1. 4 My English Class 授業事例、 お勧めのアイデア紹介 60分 x2	
	①立命館守山中学校チーム 辻大樹、吉本恵子	
	②立命館高等学校 武田菜々子	

第2回 2013,7,21「英語指導とテスト」		
10：00-11：20	1. ねらい、活動と整合性のあるテスト、(講義と実習)	
	留意点具体例	湯川
	performance test,	山岡
11：30-12：30	2. 新米教師が陥りやすいテスト作りの穴 —事例紹介と解決法 (講義) 立命館宇治中学・高等学校 今川佳紀	
13：40-15：10	3. テストの検討会 (workshop) 小グループ で検討 60分	
	全体で検討のまとめ	山岡
15：20-17：20	4. My English Class 授業事例 60分 x2	
	①テキスト使用、4技能の統合、レベルの上下を加味した調整	
	立命館宇治中学・高等学校 小久保久美子	
	②中学校生徒指導と英語授業の接点	
	立命館守山中学・高等学校 辻大樹	

第3回 2013,8,10「タスク(プロジェクト)型授業」		
10：00-10：40	1. 今回のテーマ設定の意図、タスク、プロジェクトの定義、タスク型授業の意義	湯川
10：40-12：00	2. 小学校で英語を習ってきた中学生にふさわしいタスク型活動 実践例紹介	
	立命館中学・高等学校 中西美佐・松尾由紀	
	高校生にふさわしいタスク型活動 実践紹介	
	立命館宇治中学・高等学校 今川佳紀	

12：00-12：30	自分の生徒に望ましいタスク型活動を考える— グループ討論 (大学院生より提案)	
13：40-13：55	3. My lesson- sharing time その1	
13：55 - 15：00	4. English Camp、speech, recitation, presentation 大会などのイベント —企画のポイントと活動案	山岡
15：10-16：10	5. 中学校の指導法	
	立命館慶祥中学校・高等学校 吉田恒	
15：20-17：20	6. My lesson- sharing time その2	
17：30-18：00	7. 総括討論	

上にあげた全3回の研修内容が、追跡調査と若手附属校教員の観察結果にもとづいて、どのようにニーズに対応して組み立てられているのかを、以下に説明する。

(1) 若手教員は、基礎的な4技能の指導に軒並み自信がないと感じていることが追跡調査で判明したことから、附属校ベテラン教師の授業のやり方を、参加者を生徒に見立てたワークショップを通して紹介してもらうことにした(第1回、立命館守山中学校と立命館高校より、第2回立命館宇治高校より、第3回立命館慶祥中学校より)。ただ、それに先だって、教師がそれぞれのアクティビティを、「意味理解」、「意味伝達」、「言語フォームの学習」、「流暢さ訓練」のうちのどの目的のために行っているのかを明確に判断できるように、また、言語習得を促すための最善の状況を整備できるように、理論的な土台形成のための講義をした(湯川)。

(2) 新学習指導要領の施行に伴い、2013年度から高等学校では「英語表現 I, II」という科目が教えられるようになった。外国語である英語を使って発信できるようにするためには、学習初期のころからの段階的な指導が必要なため、そうした積み上げが不十分な状態で高校に進学してきた高校生の指導は非常に困難である。生徒の生活の中で

意味を持つ内容を発信できるように育てる英語授業には高度な指導技術が必要なので、新卒の教員にはハードルが高い科目であると言える。こうした理由から、この科目の指導のやり方については、第1回に特に時間を設けて紹介した（山岡）。

(3) 第2回には、追跡調査で困っていることが判明しており、就職前の教師教育では扱いにくいテストの作り方に焦点をあてた。学部の教科指導法クラスは、学習指導案を初めて書くというレベルで演習科目を教える段階である。したがって、定期テストの作り方など、授業を教えた体験との関係でのみ具体的なノウハウがイメージしやすい事項を扱うのは時期尚早の感が否めない。扱ったとしても表層的に墮してしまう懸念があるため、本学の必修の講義科目である「英語科教育概論」の中では、一般的なテストの種類や観点別評価について言及する程度にとどめている。

研修での扱い方については、他のテーマと同様に、最初にテストの種類や目的ごとの妥当性を理論的に確認し、定期テストのよしあしについてサンプルを示しながら概説した（湯川）。また、口頭、筆記で産出した言語パフォーマンスを評価する方法にも焦点をあてて具体的なノウハウを紹介した（山岡）。

それを聞いた後にあらためて、自分や他の参加者が作った定期テストを見直すことで、多くの気づき生まれ、基本的な理念がまだ十分共有できていない同僚との調整の必要性を参加者が実感することとなった。

(4) 第2回には、追跡調査で言及が多かった生徒指導面に焦点化したセッションを設けた。第1回で英語授業のノウハウの説明をしてもらった同じ発表者に、今度は、一定程度理解したその授業の中で、教師がどのように生徒指導について留意し、生徒が学習に向かっていけるように工夫をしているのかを紹介してもらった。

(5) 第3回には、現在の英語教育分野でよく聞かれる「タスク」や「プロジェクト」という概念を理論的に整理し、若手教員にはかなり難度の高い実践ではあるが、将来への展望を示す意味で、タスク型授業をテーマとして取り上げた。

(6) 大学・研究科を卒業してから、京都を遠く離

れて、地方の学校に就職した場合には、学生時代のように、同じ基礎知識（用語）を使用して英語教育を語れる同僚や、ロールモデルと仰げる達人が常に身近にいるとは限らない。同じ段階を試行錯誤しながら、初心を忘れずにがんばっている仲間定期的に会って自分を鼓舞したいというニーズがあることは、追跡調査の自由記述欄や、卒業生との交流の中で分かっていた。そこで、第2回の、自分のテストを持ち寄る企画に続いて、第3回では、自分の実践の一端を公開するチャンスも設けた。うまくいったと感じたものなら、たとえワークシート一枚でも、授業に使った画像1枚でもよいのでという条件で参加者が発表する機会を設けた。

IV 参加状況

全3回の研修の参加者の内訳は以下の通りである。

表2 研修会参加者内訳

	①同窓生教員	②附属校教員①を除く	①②以外の教員	学生	合計*
第1回	21	7	2	9	39
第2回	16	4	2	6	28
第3回	18	6	5	2	31

*参加者人数には著者ら2名は含まれていないが、それ以外の発表者は含んでいる

今回は、主旨が同窓生の若手教員に対して追跡調査の結果を踏まえての研修にあったので、半クローズドの形態をとり、追跡調査の対象とした同窓生と附属教員以外には広報しなかった。英語教員を目指す学生についても、すでに教員免許を取得しているケースや、または教育実習を済ませている大学院生には呼びかけたが、そうした段階に達していない学生に対しては、研修内容のレベルが合致しないと考えてこちらから声をかけることはしなかった。ただ、先輩から聞いて参加を希望してきた学生や、同窓生と交流の深い他大学出身の同僚や友人などが参加を希望してきた場合には、参加してもらった。

同窓生の追跡調査で返事があったのが34名(う

ち有効回答は33名）であったことを考えると、大学とつながっていたいという希望を持っている同窓生教員は、当日に校務で支障がない限り、かなり参加したように思われる。

北陸、九州、中国、中部地方からかけつけた同窓生もあり、交通費と宿泊費などを考慮し、1回の研修会をなるべく豊富な内容で、長時間学べるようにした。

第3回の参加者に、勤務の状況から参加しやすい研究日程について聞いたところ、表3に示すように、これといってよい日程があるようでもなさそうであった。とにかく研修の日程や内容が早い時期から決まっている（月の第〇曜日などといった定期的な開催の可能性も含めて）ことが参加計画の助けになるであろうと思われた。

表3 研修開催時期や形態への希望

土曜の午後	日曜日	長い休みにまとめて数日	いつでも同じなのでできるだけ早く予定がわかればありがたい
9名	6名	6名	11名

全回答者23名、複数回答あり

V 参加者の学び

研修に参加した若手教員の授業が2学期以降実際に変わったのか、あるいは、単年度3回くらいの研修では第3者にも分かる形で明確な変化を遂げることは難しかったのかは、今後の検証に待たざるを得ない。

ここでは、第3回の研修に最後まで参加した受講生22名に問うた、今回の研修の意義についての自由記述を分析して、参加者の学びを推し量りたい。

参加者には、自由記述欄で次のように問いかけた。「よい英語教師になるには、とても長い間の研鑽と経験が必要です。たった3日間、12コマ相当程度の研修で急によい教師になれるわけではありません。また、授業が始まってみなければ自分の中の授業力の変化は分からないでしょう。それでも、意欲の変化や、自信、授業の変化への期待など、なんらかの予感ひょっとしたら生まれたかもしれません。差し支えない範囲で、こ

の研修のあなたへの意義について書いて下さい。」

この欄には、単に主催者への謝意や、研修に参加する前の勤務先での状況に言及した記述もあった（11件）が、それらを除くと、明確にこういうところに意義があったと記載している記述が全部で51件あった。それらを個別にカードに書き出し、類似のものでカテゴリ化し、カテゴリ間の関係を考えて分類したものが表4である。

表4 研修意義（獲得したこと）

カテゴリ	① アイデア取得			② 授業構成再考		③ 理論と実践の統合	④ 動機向上	
	a 活動アイデア	b 機器使用法	c 教材研究	a 構成再考	b 意欲向上のための構成	-	a 動機向上	b 英語力向上意欲
記述数	21			12		5	13	
下部カテゴリ	13	3	5	7	5	5	12	1

表4で分類した①から④のカテゴリを、さらに、細分化してa, b, cにわけたそれぞれの下部カテゴリから、典型的な記述を拾って、以下に記す。

① アイデア取得—授業の活動のためのアイデアが取得できたとするコメント

【① a 活動アイデア】

・たくさんの授業のアイデアを見せていただくことで、多くのヒントを得ました。これらのヒントをそのまま自分の授業に使うのではなく、エッセンスとして取り入れ、自分の生徒たちに合うよう調整しながら、活用していきたいと思います。

・多くの先生方の授業のアイデアや、評価方法など、とても勉強になることばかりでした。まだ教壇に立ったばかりですが、この研修で学んだ知識を自分の授業でも取り入れられるよう、夏休み以降工夫していきたいです。

【① b パワーポイントのスライドなど機器使用の

【アイデア取得】

- ・授業工夫についてのアイデア（プロジェクターの利用、考えてみます）
- ・まずは、高学年に対して、パワーポイントを使った資料（ティーチングマテリアル）を作成して、子供たちの反応をみたいと思います。

【①c 教材研究（をする意義の再確認）】

- ・それらを総合して、私の中では、もう一度教科書をよく研究しようと思えたことが自分の中の変化かもしれません。
- ・教科書をもう一度違った視点で、捉え直し、英語力をつけるための教材として使えるようになりたいと思いました。

【②授業構成再考—授業の組み立て方に再考がいると認識できたとするコメント】

【②a 授業の構成】

- ・「コミュニケーションな授業を！」「アウトプットを！」と考えるあまり、その前の段階のインプットやドリルが不足していたり、自分が生徒にどんな力をつけさせたくて、その活動をしているのかわかっていなかったり、自分の授業や意識を客観的に見直すことができました。
- ・1つ1つの活動の意義を理解して、授業を組み立てる。

【②a 生徒の動機を高める授業の構成】

- ・この研修会に参加することによって、目指している先生たちの授業の実践やヒントなどを知ることができたので、2学期から絶対に meaningful でモチベーションが上がる授業を目指してがんばろう！という意欲がわいてきました。
- ・生徒たちに少しでも英語の魅力が伝わり、英語に興味を持ってもらえる授業作りができたと思います。

【③理論と実践の統合—両者を結びつけて考えることができたというコメント】

【③理論と実践の統合】

- ・理論と実践が結び付いた部分がありました。
- ・この授業で自分のやっていることが他のすばらしい先輩方の実践を見て、まったくはずれていないことに自信がもてた。（学校の3人の英語の先

生とは違うやり方をされていて、心細かったのです。）

- ・大学で学んだ言語教育の原則を職場で応用していた内容を発表しました。その方向性や活動を今回のような機会発表者という立場でありましたが、多くの先生に見てもらったこと、アドバイスをもらったことで、また自信になりました。

【④動機向上】

【④a 動機向上】

- ・新学期からは、頭の中で構想していることを今回の研修を通じて、先生方や他の参加者から頂いた勇気を使い、思い切りチャレンジしたいと思います。
- ・英語教育になかなか力を注げない中、自分の英語教育への関心・意欲を引き戻してくれたこと。

【④b 英語力向上動機】

- ・英語力についても、美しい発音で授業をされる先輩先生を拝見し、自分も近づけるように、努力しようこれまで以上に強く思いました。

以上、参加者にとっての研修の意義は、表4にあげ、上記に例を示したように、①個々の教え方のアイデアと②それをどう組み合わせるかという構成、③それが理論的土台と結びついた形で再確認でき、④2学期以降の授業に生かしたいという強い意欲を呼び起こすこととなったのである。英語教師に必要な知識や技能のうち、今回の研修では、指導法に特化した。したがって、英語学や英語圏文化についての知識や、英語教師が自分の授業を振り返るためのアクションリサーチのノウハウ、機器の研修等、指導法以外のことを取り扱わなかったため、学びが上記の項目に収斂されたのは当然の結果であると言えよう。参加者が教授法の面で、部分的にでも明日の授業に生かしたいという意欲をもって終われたことはこの事後アンケートによく表れている。

著者らは大学や大学院で繰り返し「いい教育をするためには、方法論や技術だけにとらわれることなく、まずは身をもって自らを磨くこと」と説いてきた。今回は英語教師の持ち合わせるべき深い知識や経験などについては、ベテラン教師の技術を通して間接的に垣間見るといった設定となった

が、それでも参加者が今回の研修を通じて、多少なりともこの原点を思い起こしてくれたことを期待したい。

Ⅵ 今回のパイロット実践で得た教訓

今回のパイロット実践の成果および継続的教師教育を企画する上で分かったことを、以下にまとめる。

- ①今回は、先進的な授業の公開や1個人の発表だけでなく、テーマを定め、そのテーマにそって理論の講義とそのテーマに関する実践を組み合わせ、同日に提供した。このことで、聴衆も実践を公開した発表者も、応用性のきく知識が得られ、好評であった。
- ②1回の研修が終日もしくは半日でも5時間と、かなり長めに設定した。3回全部出席すると、12コマ相当（大学の1学期の授業は15コマで構成）になる量の研修が可能になった。今後も半集中講義のように設定すれば、かなりの研修が期待できる。
- ③参加者は基本的に同窓生と附属校教員ではあるが、在籍年度のずれなどがあるため、今回初めて顔を合わすケースも多かった。研修中、および研修後の懇親会を通じて、中堅・ベテラン・同年代と豊富な人材に出会い、情報交換ができるネットワークができた。
- ④同窓生の中には、宿泊を伴わなければ研修に参加できないほど遠方に勤務している者もいたが、内容をはっきり説明して広報すれば、万障繰り合わせて参加することが分かった。
- ⑤多忙な中でも、同窓生・附属校教員自身に発表を依頼すると、断られることは少なく、若手教員の短時間のアイデア公開についても、（聞いているものは当然のことながら）発表者にとって励みになることが分かった。

Ⅶ 組織的、統合的な教師教育のための今後の課題

今後、組織的、統合的な現職教員むけの教師教育を企画するためには、次のような問題やあらたな課題が浮かび上がってきた。来年度以降の研修企画への参考にしたい。

- ①非常に参加したいのに、校務等の関係で、ある

回を欠席せねばならなかったという声を多く聞いた。この場合に、なんとか、研修内容（一部や概要であっても）を伝える方法が必要である。今回については、事後にリクエストがあった場合にそなえてレジメを残したり、数部についてはDVDにやいて貸出したりもした。会員制にして限定的に動画をオンライン上で視聴できるようにするためには、非常に高価なサーバーレンタル料が必要なことから、せめて講義部分だけでも講義録を作成し、専用にウェブページを立ち上げて掲載するなどの工夫が必要である。

- ②1回の研修に参加できる人数は限られているので、テーマごとに提供した研修が、参加者を変えて、複数回提供できるように企画することが必要である。そのためには年間シラバスを立てて、早い時点でそれを公開することで、参加者が選択的に参加を計画できる必要がある。

- ③今回は、2007年4月以降に就職した同窓生教員を対象にしたため、共通の基礎知識が期待できたが、今後同窓生に限らず広く研修を公開するためには、それぞれの教師の知識や訓練のレベルによって研修内容を調整する必要がある。また、理念的には同じことを伝えていても、中学校、高等学校や、その生徒のレベルによって、実践例としてあげる事例や教材は変わってくるので、学校種の別もニーズ分析対象の変数となる。

見込める人数にもよるが、学校種別、基礎知識の有無ごとに、コースに分けて研修を提供する可能性も視野に入れたい。

- ⑤本研修は、J-POSTLの記述文をツールとして、現職教員が「できない」と感じている技能や足りない知識を補うべく企画した。では、何をどれくらいの量提供することで、何年くらいの研鑽を重ねれば、おおむね、必要な能力が身についたと感じられる段階に到達できるのかが知りたい。これは5年、10年のスパンでしか知り得ないことではあるが、取り組む意義は大きい。

- ⑥本稿の焦点は現職教員の研修であるが、この研修が、就労前の学生に何らかの形で役立てられないかという点についても、模索が必要である。現職教員用の情報ウェブページに、真剣に教師を目指す学生がアクセスでき、オンライン上での交流

をきっかけに、対話やインターン、ボランティア、研究が生まれるなど、多様な可能性が考えられる。

VIII 結語

本稿では、同窓生英語教員に、さらにどう支援できるのかを模索し試行したパイロット実践の、企画、成果、今後の課題をまとめた。継続的によい人材を学校現場に送りだし、その苗木がしっかりと育つまでサポートを続けることは、若手教員の離職を防ぐことにつながり、教職課程認定を受けている大学の社会的責任でもある。教員免許更新講習が大学での開催する研修として制度化されているのに対し、初任者や比較的経験の浅い教員に対する研修の提供は、あくまで任意で自主的な活動にすぎない。担当者には非常に負担の大きな作業ではあるが、望まれる現職教員教育の姿が浮かび上がるまで、しばし模索を続けたい。

【引用文献】

Faez, E, & Valeo, A. (2012) . TESOL teacher education:

novice teachers' perceptions of their preparedness and efficacy in the classroom. *TESOL Quarterly*, 46, 3,450-471.

Farrell, T. S. C. (2012) . Novice-service language teacher development: bridging the gap between preservice and in-service education and development. *TESOL Quarterly*, 46, 3,435-449.

JACET 教育問題研究会 (2011) . 『教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書 研究課題番号: 22320112 研究代表者 神保尚武

文部科学省 (n.d.a) . 「指導が不適切な教員の人事管理に関する取組等について」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/10/08101705/001.htm よりダウンロード .

文部科学省 (n.d.b) . 「魅力ある教員を求めて」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301/001.pdf よりダウンロード .

湯川笑子・神藤貴昭・山岡憲史・太田啓子 (2013) . 『立命館大学教職課程を履修した若手英語教員追跡調査 2012』立命館大学 2012 年度研究推進プログラム報告書

Yukawa, E. (2013) Novice English teachers' English proficiency, grades at the university, and teaching abilities. Paper presented at ELT Teacher Journey Conference Kanda. Kanda Gaigo Gakuin. 2013 June 16.